

男女同数（パリテ）を達成した メキシコ連邦議会―現地調査の記録―

馬場 香織

北海道大学大学院法学研究科准教授

パンデミックを経て、久々のメキシコ訪問

二〇二二年一月より三カ月間、調査研究のためメキシコシティに滞在した。二〇一九年に同国を訪れて以来、約三年ぶりの渡航となった。あのときはまさか次にメキシコを訪れるのがそれほど先になるとは予想もしていなかったが、世界的なパンデミックの影響で、研究者も海外に行きにくい状況が長く続いた。二〇二二年後半になって、ようやく海外との往来も以前のレベルまで回復してきた感がある。



メキシコ連邦下院本会議場にて、労働党のMaría Rosete議員と筆者。

長きにわたって海外渡航が制限されたことは大きな痛手だったが、この間オンライン・ツールの導入が飛躍的に進み、国際的な研究交流は活発化した面もある。国内外の学会はオンライン開催となり、現地のシンポジウムや研究会にもオンラインで気軽に参加できるようになった。研究に必要な多くの資料やデータも、今日ではインターネット上で比較的簡単に入手することができる。わざわざ現地に赴かずとも、論文を書くことは可能である。しかしながら、今回メキシコにやってきて、現地に足を運ぶことはやはり大事だなと思った。インターネットの情報だけでは、現地で起こっていることを把握するには限界がある。実際に人と会って話して、地下鉄やバスに揺られ、市場やショッピングモールの活気を感じて、そうするなかで「メキシコのいま」が実感として浮かび上がってくるように思える。政府の支持率や物価の動向を統計で知ることができるが、実際に人々がそれをどう受け取っているのかを感じるのはとても重要なことだ。

メキシコのパリテ議会―女性議員に訊く―

今回の主な渡航の目的は、女性の政治参加に関

する女性議員へのインタビュ調査である。メキシコはいま女性議員の割合が世界で最も高い国の一つで、連邦議会の上下両院でほぼ男女同数が達成されている（二〇二二年一月現在の女性議員比率は、下院五〇％、上院四九・二％）。メキシコは他のラテンアメリカの国々同様に、国民の大半がカトリック教徒で、マチスモと呼ばれる男性優位の文化が伝統的に強いといわれる。そのメキシコで連邦議会議員の男女同数が実現したのはなぜなのか。また、女性議員が増えたことで何が変わったのか。メキシコの事例は日本にも示唆があるはずだ。こうした関心のもと、さまざまな会派の上院・下院議員の女性たちにインタビュを実施した。

通例としてインタビュ冒頭に研究の趣旨説明を行うのだが、そのなかで「日本の衆議院議員の女性比率は一〇％に満たない」という話をすると、だいたい驚かれる。日本の政治についてメキシコではほとんど知られていないこともあるが、「日本は経済的に豊かで、最先端技術を誇る国なのに、どうしてジェンダー格差が縮まらないのか」と、逆に質問されてしまう。外国人からみても、日本における女性議員の極端な少なさは謎なのである。メキシコではなぜ女性議員が増えたのか。端的にはジェンダー・クォータ制（候補者または議席の一定比率を女性または男性に割り当てる制度）の効果である。メキシコでは二〇〇三年の連邦議会選挙において初めて強制力のある候補者クォータ制が導入され、当初は基準が三〇％だったが、二〇〇八年の選挙法改正で四〇％まで引き上げら

れ、二〇一四年に男女同数（パリテ）が定められた。こうした段階的な法改正に伴い、女性議員比率も徐々に増加していった。

同時に、司法の役割も大きかった。メキシコでは、選挙に関して専横の権威を有する選挙裁判所の制度が確立しており、その最高権威が連邦司法選挙裁判所である。通常の最高裁判所も存在することができない。この選挙裁判所が、法律の抜け穴をつくような政党の行い（例えば、勝ち目のない選挙区ばかりに女性候補者を割り当て、表面的にクオータの数を満たすなど）に対して、それを否定する画期的な判決をたびたび下し、クオータ制の実質的な適用強化に貢献してきた。

もともと、クオータ制の導入が国民全体のコンセンサスの下でスムーズに進んだわけではない。インタビュアーからは、女性議員、政府、官公庁および司法府の女性たち、そして市民社会によって構成される党派を横断する連帯が、クオータ制の推進において非常に重要だったことが浮かび上がった。イデオロギーやセクターといった違いは乗り越え、女性の政治参加という一点については協力し合う。こうした横の連帯がなければ改革は不可能だったと、彼女たちは一様に振り返った。

こうして連邦議員の男女同数が達成されたメキシコでは、新たな挑戦が始まっている。二〇一九年に「パリテ」をすべての公的部門に適用する憲法改正が行われ、地方も含めて議会、政府、司法のすべての部門で男女同数が義務化された。現時点ですべて達成されているわけではないが、専門

の公的機関が進捗状況を監視し、データ開示や提言などを行っている。また、女性だけではなく、性的マイノリティ、先住民、アフロ・メキシコ人などといった多様な属性に焦点を当てた政策も、以前に比べて活発に議論されるようになった。

ある女性議員によれば、現在のメキシコはいわば「女性議員ブーム」の段階にあり、「女性の議員であること」が国民から肯定的に受け取られる傾向があるようだ。女性は男性に比べて、既存の腐敗した政治に染まっていない清廉な印象を与えるからかもしれない。ただしそれは一時的な波に過ぎない、と彼女はいう。「しばらくすれば、女性だからクリーンということもないのだと国民も気づく。男性議員が多様であるように、女性議員も一人一人違って当然。女性であるという『ブランド』が消えるとき、本当の意味でパリテが定着したといえるのだと思う。」

インタビュアーのあとの楽しみ

明確な理念やビジョンを持った女性議員たちに刺激を受けるのはインタビュアーの醍醐味だったが、下調べを含め事前の準備は地味に大変だし、外国語での専門的会話には集中力が必要だ。結果として、インタビュアーが終わると、毎回ものすごくお腹がすく。

そこで楽しみなのが、「コミーダ・コリーダ」と呼ばれるメキシコの日替わり定食である。ちょっとしたコースになっていて、スープ、パスタからイス、メインを、その日ボードに書いてあるメ



鶏骨つき肉と林檍のチポトレソース、アーモンド風味

ニューからそれぞれ選べる。好物のレンズ豆スープがあるときはラッキーと思う。メインは安い材料でも店によって創意工夫がなされていて、先日下院近くの食堂で食べた「鶏骨つき肉と林檍のチポトレソース、アーモンド風味」と題されたひと皿は、本当にびっくりするほど美味しかった（チポトレは果実のような香りのする唐辛子の一種）。これにとりもろこしで作るトルティージャ、季節の果物を絞ったジュース、簡単なデザートがついて、七〇〜一〇〇ペソ（四九〇〜七〇〇円）程度で食べられる。

メキシコの食堂は人の温かさも魅力だ。隣のテーブルの夫婦に話しかけられ、日本から来たというと、ご馳走してくれたこともある。美味しいごはんは人との触れ合いで、調査の疲れも癒やされるのだった。帰国して二週間が経ち、すでにメキシコが恋しいこの頃である。

へばは かおり